

ね ぎ

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 9月の気温及び降水量はともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
べと病	-	やや少	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 9月の気温及び降水量はともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
葉枯病 黒斑病	-	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 9月の気温及び降水量はともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ネギコガ	-	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)
ネギハモグリバエ	-	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かったが、被害程度の高い圃場率は平年よりも高かった。(±) (2) 9月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(＋) (2) 9月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○葉枯病（黄色斑紋病斑）の発生を防ぐため、効果の高い薬剤での防除を徹底しましょう。

○ネギアザミウマによる被害が大きい圃場が見られるので、密度を低下させるため、効果の高い薬剤を散布しましょう。

【共通事項】

- (1) 収穫期が近い作型では、使用時期（収穫前日数）に特に注意して薬剤を選択する。
- (2) 気温が低下すると各種病害の発生が多くなるので、散布間隔が空かないように定期的な防除に努める。
- (3) 同一系統の薬剤を連用せずに、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。
- (4) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (5) 圃場内、周辺の雑草除去に努める。

【さび病、べと病】

- (1) 多発すると防除が困難となるため、予防散布に努め、発生がみられた場合には、効果の高い薬剤を散布する。

【葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）】

- (1) 秋冬ねぎでは、黄色斑紋病斑（図1左）の発生が9月頃から増加するため、9月上旬～10月上旬までは10日間隔で効果の高い薬剤（テーク水和剤、アミスター20フロアブル、ダコニール1000）を輪番で4回散布する。



図1 葉枯病の病斑
(左：黄色斑紋病斑、 右：褐色斑点病斑)

【ネギコガ】

- (1) 県中南部では今後も発生が続くので、9月下旬まで防除を実施する。また、県北部でも圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

【ネギアザミウマ・ネギハモグリバエ】

- (1) それぞれの害虫に適用のある薬剤で防除する。
(2) ネギハモグリバエとネギアザミウマの食害が両方見られる場合、ディアナSCやベネビアOD、グレースア乳剤、ファインセーブフロアブル、ダントツ水溶剤等、両害虫に適用のある薬剤を選択する。
(3) 定期的な防除を実施し、密度低下を図る。